「太陽」　　****

２０１６（平成２８）年４月３０日鑑賞＜
シネ・リーブル梅田＞

監督・脚本：入江悠
原作・脚本：前川知大『太陽』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ刊）
奥寺鉄郎（キュリオの村に生まれ、ノクス社会へ憧れる青年）／神木隆之介
生田結（キュリオの村に生まれた鉄郎の幼馴染）／門脇麦
森繁富士太（ノクスの駐在員、鉄郎の友人）／吉川雄輝
生田草一（結の父）／吉じ寛治
佐々木行雄（キュリオの村のリーダー）／綿田俊樹
佐々木拓海／水田航生
金田洋次／高橋和也
曽我玲子（ノクスへ転換した結の母）／森口瑤子
奥寺克哉（鉄郎の叔父）／村上淳
奥寺純子（鉄郎の母）／中村優子
曽我征治（ノクスとなった玲子の再婚相手）／鶴見辰吾
２０１６年・日本映画・１２９分
配給／ＫＡＤＯＫＡＷＡ

＜原作と本作が提示する近未来の世界観に注目！＞

ＳＦモノ近未来モノが提示する世界観には多種多様なものがある。小松左京の原作を映画化した『日本沈没』（７３年、０６年）はいかに本当に起こりそうな科学性やリアリズムが恐怖感を増幅させていた（『シネマルーム１１』５０頁参照）し、その「ロボティ版」としての『日本以外全部沈没』（０６年）も面白かった（『シネマルーム１１』５８頁参照）。また、『アイ・アム・レジェンド』（０７年）（『シネマルーム１８』３６９頁参照）はウィルスのため、『ザ・ウォーカー』（１０年）（『シネマルーム２４』７６頁参照）は核のためにほとんど滅びた人類の姿を描いていた。また、直近の『隙の惑星　新世紀（ラビジング）』（１４年）（『シネマルーム３３』２４６頁参照）をはじめとする、『隙の惑星』シリーズも、ありえない設定ながら、「ひょっとして・・・」と思わせるところが三ツ巴だった。さらに、『パトル・ロワイアル』（００年）は、新世紀教育改革法・通称「ＢＲ法」が制定された近未来の日本を、『イキガミ』（０８年）は国家緊急維持法が制定された近未来の日本の姿を興味深く描いていた（『シネマルーム２１』１４９頁参照）。

しかして、本作の原作である劇団イキウメの前川知大が書いた戯曲『太陽』は、新人類「ノクス（夜に生きる存在）」と、旧人類「キュリオ（青葉的存在）」の世界を描くもの。原因不明のウイルスの拡散によって人類はこの２つに分断されてしまったそうだが、本作ではまず原作と本作が提示する、そんな近未来の世界観に注目！

＜いくつかの前提事実の下で、２人の主役が登場！＞

本作の鑑賞については、ノクスとキュリオへの分断という大前提の中、いくつかの重要な前提事実を押さえておく必要がある。その第１はノクスはウイルスの感染を克服し、心身ともに進化したけれど、それと引き換えに大陽の下では生きられない体質になってしまった新人類だが、キュリオは、太陽の下で自由に生きられるものの、ノクスに管理されることで賛同を強いられている旧人類であること。第２はキュリオからノクスへの転換は可能だが、それは２０歳までの若者に限られていること。そんな前提事実の下、本作導入部では、ともあるべきノクス駐在員がキュリオの男・奥寺克哉（村上淳）によって殺され、克哉は逃走してしまうという事件が描かれる。

去る５月６日～９日には、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で３６年ぶりに朝鮮労働党の党大会が開催され、そこで新たに「党委員長」に「推戴」された金正恩は、核ミサイル開発を持示している。しかし、それによって北朝鮮はアメリカのみならず、中国からも経済制裁が強化されることに。それと同じように、克哉が事件を起こしたキュリオの村はノクスからその制裁としての経済封鎖を受けることになったが、より一層貧しくなるとともに、ノクスへの転換のチャンスを奪われてしまったから大変だ。

しかし、それから１０年後の今、経済封鎖が解かれるとともに、転換のチャンスも復活することに。そんな中で、奥寺純子（中村優子）の息子である奥寺鉄郎（神木隆之介）と、曽我玲子（森口瑤子）の一人娘で鉄郎の幼馴染みの生田結（門脇麦）を軸とする物語が展開していくことに・・・。

＜転換を希望するのは当然？そんな価値観の是非は？＞

本作の前提によれば、ノクスになれば太陽の下では生きられないものの、心身ともに進化し、豊かな生活が送れるのに対し、キュリオは完全にノクスに管理され、貧しい生活しか送れないのだから、ノクスのほうがいいに決まっている。マルクスは資本家と労働者と言った、現在の社会は持つ者と持たざる者を二分しているが、そこでの問題は相互の転換可能性がない（弱い）こと。ところが、本作の前提によれば、選択肢争はあるけれども、２０歳までに決断すれば、転換手術によって、ノクスからキュリオへの転換は可能なのだから、誰だってその転換を希望するはずだ。そんな価値観を持つ私は、当然本作の鉄郎の考え方を支持するが、他方で、そのことにあまり興味を示さない結のような女の子もいるから面白い。もっとも、これはノクスへの転換のために積極的にゲートの駐在員である森繁富士太（吉川雄輝）と友達になり、情報交換をしようと努力を続ける鉄郎と違って、結の方は自分の将来を真剣に考えていないだけでは・・・。

キュリオからノクスへの転換の応募が始まると、鉄郎が真っ先に応募したのは当然だし、鉄郎のそんな潔望の仕方をみれば、鉄郎が選ばれるのは当然。鉄郎はもちろん、村民たちの多くはそう思っていたが、選ばれたのは何と結だったから、アレレ・・・。自分に内緒で父親の生田草一（吉じ寛治）が応募したことの結果に結が困惑したのは当然だが、そこで自分が選ばれなかったことに納得できず、怒り狂ったのは鉄郎だ。本作を見ていても、なぜ結が選ばれ、鉄郎が選ばれなかったかの選抜基準がサッパリわからないから、そこらあたりの脚本は手抜きとしか言いようがない。それはともかく、鉄郎の怒りはその後どんな方向に？

＜異い民った克哉が再び事件を！＞

第１作から第４９作まで続いた山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズでは、渥美清演じる「フーテンの寅さん」こと車寅次郎が、ひょんなことから生まれ故郷であるおじちゃんが経営する葛飾柴又の団子屋に帰ってくるたびに、恋愛騒動を軸とした家族くるみの大騒動が起こるのが常だった。それと同じように、本作では１０年ぶりに克哉が戻ってきたことによって、更なるストラブルが今日なるから、それに注目！

克哉は１０年間もどこに逃亡し、どんな生活していたのか？そんな克哉がなぜ今再び生まれ故郷に戻ってきたの？そこらあたりの説明が不十分なところも本作の弱点だが、何事にも乱暴な克哉は、ゲートの門衛をしている森繁の手に手錠をかけてゲートにつないだまま、手錠の鍵を広い原っぱの中に放り投げてしまったから、さあ大変だ。

ノクスの世界では毎朝太陽が出る前に、「早くノクスの世界に戻りましょう」とアナウンスされていたが、手錠でゲートにつなげたままでは、森繁は大陽の光を浴びて焼け死んでしまうことになる。コトの一部始終をその側で見ていた鉄郎は、森繁の要請を受けて斧で必死に手首ごと森繁をゲートから切り離そうとしたが、さてその後の森繁と克哉の運命や如何・・・？

＜本作中盤のドタバタ劇は？その解決策は？＞

他方、１０年前に村がノクスから経済封鎖を受ける原因を作った克哉に対して、村のリーダー・佐々木行雄（綿田俊樹）や村人たちが反感を持っていたのは当然。しかるに１０年ぶりにシャーシャーと村人の前に顔を出した克哉は、傅そうに村民たちに対して「訓示」をたれる始末だったから、村人たちがそんな克哉をやっつけてしまおうと考えたのも、また当然だ。鉄郎の母親・純子だけは、克哉が更生して帰ってくるのを待っていたようだが、克哉が帰って来た時には入れ替わりによって純子はこの世を去ってしまったから、世の中は、皮肉なものだ。

本作中盤に貧しいキュリオの村の中で展開される、そんな克哉と森繁そして鉄郎や村民たちのドタバタ劇は、キュリオの村民すべての絶望の中でのもがき苦しみを象徴しているといざるを支ない。これはいわば、きっと現在も続いているであろう北朝鮮の人民たちのもがき、苦しみと同じようなものだろうが、その怨りの側け口はどこにもないことは明らかだ。しかして、さてその解決策は・・・？

＜ノクスへの転換で何がどう変わるの？＞

門脇麦は、『愛の渦』（１４年）（『シネマルーム３２』未掲載）で大阪なヌードシーンを披露すると共に、激しい喘ぎ声で勝負した女優だが、その後の成長は著しい。そんな門脇麦が演じる本作前半の生田結は、鉄郎と違って自分の意志を明確に見せない、どっちつかずのキャラだ。したがって、そんな結がノクスへの転換を切望する鉄郎を押しのけて転換者に選ばれたことに私が違和感を覚えたのは前述のとおりだ。

キュリオからノクスへの転換によって肉体的に何がどう変わるのかは本作の前提として説明されているが、それによって精神的に何がどう変わるのかは何も説明されていない。もっとも、その点は結の母親である曽我玲子が既にノクスに転換した大先輩だし、玲子の再婚相手である曽我征治（鶴見辰吾）はもともとのノクスだから、この２人の姿からある程度うかがうことができる。ノクスへの転換手術の様子も興味深いが、それ以上に興味深いのは、キュリオからノクスに転換した結が薄汚いイモ時ちゃんから、洗練されたファッションに身を包んだ美少女に変身していること。したがって、それまでは同じキュリオに属する貧しい村民として鉄郎と接していた結が、洗練されたノクスの美少女として、ゲートで鉄郎と相見えるシーンは興味深い。さあ、ノクスへの転換で人間の精神面は何がどう変わるのだろうか？

＜あなたは誰のどこに、どんな希望を見い出せる？＞

２人の「ご対面」のシーンで、結は「こんなになるのなら、もっと早くノクスに転換しておけばよかった」と語っていたが、きっとそれは本音だろう。しかし、ノクスへの転換をあれほど切望しながら、合理的な理由もないままそれを果たせなかった鉄郎は、そんな結との「ご対面」をどのように受け止めたのだろうか？そこでは、「今回はムリだったけど、また来年を目指せばいい」などの慰めの言葉が何の説得力もないのは当然だ。

一後多弱体制下でアベノミクスを推し進めてきた安倍政権下では、格差の広がり、格差の固定を批判する声が続いているが、本作に見るノクスに転換した結と キュリオの末裏でノクスに転換できない鉄郎の姿を対比していると、その批判もうなずける。もっとも、そろ考えると、戯曲として大成功した本作を何としても映画化したいと考えて脚本を書き監督した入江悠の本作の狙いは一体ナニ？そんな疑問も湧いてくる。

プレスシートにあるインタビューの中で入江監督は、「なかでも鉄郎は、どんな状況でも希望を持っている、大事な役割を担ったキャラクター。神木君本人がもともと持っている前向きさや明るさがこの役には必要で、どうしても彼に演じてほしかった。」と述べている。また、「映画を観た人それぞれが、自分などういう生活をしたいのか、どこに希望を見出せばいいのか、考えるきっかけになってもらえたらうれしいですね」とも述べている。しかして、さてあなたは本作の舞のどこに、どんな希望を見いだすことができるだろうか？